



## 和して同ぜず

看護学部 看護学科教授  
看護学部長

### 山本あい子

看護学部開設にあたり、皆様から多大なるご支援を頂きありがとうございました。今年の4月から、84名の新生入生と20名の新任の看護の先生方が来られ、看護棟は命を与えられて輝いているように感じています。

私は、四天王寺大学に着任後、現在1年と4か月目を過ごしています。本学に対する感想は、学生も教職員の皆さんも、親切で優しいということです。災害や事件、事故等、こころが凍るような出来事が多い昨今、親切や優しさという目に見える形にはなりにくい「心のあり様」は、大切な徳だと思っています。なぜ四天王寺にはこの優しさがあるのだろうかと考えつつ、礼拝や和の精神の授業に出席していました。

授業では瞑想をしたり、お経を共に唱えたり、聖歌を歌ったりしています。同時に授業の冒頭では、奥羽充規先生がいつもその時々季節にちなんだ言葉を解説され、自然の風景も映し出されています。このことを通して、私達は人との和、社会との和に加えて、人知を超えた自然との和の中で存在していることを改めて知る機会となっていることに思い至りました。私達一人一人が自然の中で生きていること、自然との調和の中で生かされていること、そしてそのありがたさを感じる一時になっていると思います。和を以って貴しとなすの教えと感謝の念があるが故に、他者に対して優しくできるのではというのが、目下の私の結論です。

今年1月の読売新聞に、「和して同ぜず」の言葉で、書家の紫舟さんが令和の次代を語られています。「異なる意見を排除しない、違いを見捨てない、個性、多様性、自主性をもって、人と和する時代こそ、この元号に見合う。」と。私たちは、四天王寺大学看護学部創りを始めたところです。お互いの違いを恐れず、信頼し尊重し合いつつ、新学部を創っていかうと思うこの頃です。



## 朝拝

事務局長

### 香川 徹

本学の学生（1年生）や教員の皆さんは、毎週木曜日の礼拝に出席し聖徳太子の教えである「和の精神」を学んでいます。事務職員も毎朝9時に「朝拝」を行っており、般若心経や敬田院の精神などを参加者全員で唱えています。

私は昨年5月に本学に参りましたが、毎朝、朝拝に参加しお経を唱えることは、驚きでもありましたがとても新鮮であり、もう一度仏教について勉強する機会を与えて頂いたと思っています。

私は仏教系の大学を卒業しましたが、学生時代には仏教について深く勉強したわけではなく、仏教に関する行事にもほとんど参加したことはありませんでした。社会に出てからは、働き蜂のごとく働いてきましたが、年を経るごとに仕事に行き詰ることや悩むことが多くなり、

気が付くと仏教に関する本を読んだり、お寺を訪ねてみたりして、最終的には社会や人のためになるかどうかで判断するよう心がけることで、自分なりに解決してきたように思います。

今振り返ってみると、学生時代を仏教系大学で過ごしたことが、仏教に関心を持つきっかけとなり、私の人生にとって大きな意味があったと感じています。大学の環境の中に仏教があり、知らず知らずのうちに身についたのだと思います。

本学では、聖徳太子の教えや仏教に接する機会が多く、授業はいうまでもなく、例えば大学の正門からは看護棟の曼陀羅が目に入り、桜坂を下ると本学のシンボルである講堂の塔が見え、また、大講堂には聖徳太子の像が安置され、授業の初めには瞑想をするなど、自然に仏教を感じる環境にあると思います。

学生の皆さんは、勉強や、クラブ活動、社会活動など様々なことに取り組まれると思いますが、和の精神を学び学生生活をおくることは、将来必ず役に立つことがあると思います。皆さんの学生生活が有意義なものとなることを願っています。

## ❖ 学園訓「健康を重んぜよ」について考える ― 因果と縁 ―

人文社会学部 日本学科教授  
日本学科長  
源 健一郎



平安時代末期に成立したある説話集に、透明人間が登場する物語が語られます。その不思議な内容を紹介しましょう。

思慮の浅い生侍が大晦日に、妻子も顧みず外で遊びほうけていた。すると、百鬼夜行に出会い、鬼につばを吐きかけられ、透明人間になってしまう。家族にも自分の姿は見えない。ただ一人、自分の姿を見ることが出来る牛飼童に声をかけられ、ある豪華な邸宅の寝所に侵入する。そこには病気に苦しむ姫君の姿があった。

牛飼童は生侍に、打ち出の小槌で姫君を打つように命じる。二人の姿は姫君の家族には見えていない。小槌を振り下ろすたび、姫君の苦痛はひどくなり、家族は姫君の死が近づいたかと嘆き、ただ泣くばかりである。

牛飼童は人間に病気をもたらす鬼の化身であった。悪行に耽る生侍は鬼の仲間に取り込まれ、さらなる悪行を犯すことになったのである。しかし、そこに強い験力を持つ行者が現れ、加持祈禱を行い、牛飼童は退散。姫君は快復し、生侍も無事に姿を現すことができた。これもすべて、生侍が信仰していた京都六角堂の観音のおかげであると人々は語り伝えた。（『今昔物語集』巻十六第三十二）

観音様の御利益によって締めくくられるように、この物語には仏教的な思想が色濃く反映しています。その様相について、具体的に考えてみましょう。

まず、この物語には、仏教の説く因果応報の道理が埋め込まれています。因果応報とは、善行には善い結果が、悪行には悪い結果がもたらされることです。物語の冒頭には悪因果が語られています。生侍は大晦日に外で遊びほうける「悪因」によって、鬼に透明人間になされる「悪果」を得たのでした。しかしながら、そんな生侍でもただ一つ、よいことをしていました。京都六角堂の観音にお参りしていたのです。これが彼の「善因」となり、最終的には透明人間から脱却する「善果」を得ることができたのです。

次に、この物語に語られた自利利他の教えを見ていきましょう。自利利他とは、自らの悟りのための修行（自利）が、同時に他の人の救済のために尽くすもの（利他）でもあることで、大乘仏教の根本精神です。冒頭には、自利利他のあり方が反転して現れます。生侍の悪行は「自利」に反するものであり、生侍のこの「反・自利」は、姫君の病状を悪化させるという、さらなる悪行、すなわち「反・利他」につながります。因果応報に当てはめれば、生侍の「反・自利」が

姫君の「反・利他」を引き起こすのですが、生侍の悪行は、姫君の病状悪化の直接的原因とは言えません。あくまで間接的原因であって、このような因果の関係を仏教では「縁」と呼びます。一方で、姫君の快復の間接的原因のひとつは、物語の締めくくりにあるように、生侍の観音信仰であったとも言えましょう。生侍の観音信仰は自らのための善行（＝自利）であったのですが、巡り巡って「縁」となり、姫君を病気から救うことに役立った（＝利他）のです。

さて、そもそも姫君は、なぜ病気になったのでしょうか。私たちの日常から考えてみましょう。例えば、薄着でうたた寝をすれば、風邪を引きます。冷たいものを食べ過ぎたら、お腹を壊します。これらは病気になる際の直接的因果です。ただ、姫君の場合、その病気の直接的原因は不明です。

それでは、姫君の病気は、なぜ悪化したのでしょうか。スマホ運転の自転車にぶつけられてケガをしたり、下宿の隣室で夜通し大騒ぎをされて、寝不足で体調不良に陥ったりといったことがあります。これらの例はいずれも間接的因果と言えましょう。姫君の場合も、本来であれば無関係であるはずの生侍の悪行が、間接的原因（「縁」）となって病状が悪化したのでした。

姫君が快復したのは、どうしてでしょうか。早寝早起きやバランスのよい食生活を心がけていれば、健康は維持できるでしょう。これは直接的因果です。腕のよいお医者さんと出会ったり、生活態度を注意してくれる家族がいたりするおかげで、健康が維持できたとすれば、これは間接的因果（「縁」）によるものです。生侍の観音信仰という「善行」は、直接的には彼が透明人間から脱却する「因」（自利）であったのですが、同時に、姫君が快復する「縁」（利他）ともなったのでした。

この物語は、様々な「因」や「縁」によって、時には支えられ、時には損なわれるのが人の健康であると、私たちに教えてくれているようです。

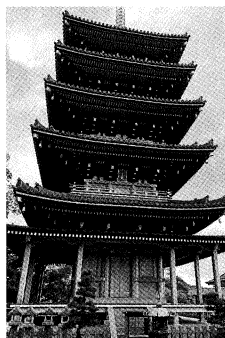
改めて、私たちの健康、すなわち命について考えてみましょう。因果応報の教えに基づけば、私たちは、自らの命に対する「善行」をつねに志すべきことが明らかでしょう。さらに大事なものは、このような自らの命に対する「善行」は、「縁」として巡り巡って、他の誰かの命を支えることもありえるのだということに気づくことではないでしょうか。お互いの命は、自利利他のなかで支え合っているのです。

本学の建学の精神には「帰依渴仰、断悪修善、速證無上大菩提處」とあります。一人ひとりの「断悪修善」の毎日は、自分自身の、そして周りの人々の命や健康を支えていくことでしょう。人は、「病気」や「けが」、「老い」を避けることはできません。それでも、善因善果と自利利他を心がける、そうした善行の積み重ねは、必ずお互いの「心の健康」「心の豊かさ」につながるでしょう。学園訓とともに、そうした健やかな日々を過ごしていきたいものです。

### ウパーヤ学生編集員を募集しています

仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加していただける学生編集員を募集しています。仏教、寺院、仏像、巡礼、歴史、日本文化などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方ならどなたでも歓迎します。当然、学科専攻も問いません。

これまで第4面の「聖徳太子のゆかりの地をめぐる」の取材の執筆、およびその取材見学の様子をホームページに紹介するなどの活動をしてきました。また、本学が仏教教育の一環として実施している野中寺での座禅会に参加し、その実施状況をレポートしていただいた



こともあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第4面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声を掛けてください。

ご連絡お待ちしております。

（奥羽 充規）

## 第 15 回 卒業生インタビュー

話し手: 赤穂 光郁 (あかほ みつふみ) 社会福祉法人四天王寺福祉事業団  
平成 22 年 3 月 人文社会学部人間福祉学科社会福祉専攻卒業生、  
平成 31 年 3 月 人文社会学部人間福祉学専攻博士前期課程修了生  
聞き手: 坂本 光徳 (和の精神 I・II 導師・人間福祉学科健康福祉専攻専任講師・本欄編集)



### 仕事について

卒業後、大学に隣接している四天王寺福祉事業団に就職して、まずは高齢者支援に携わり、特別養護老人ホーム、デイサービスセンターの部署に勤めてきました。一時期、羽曳野市の社会福祉協議会に出向しましたが、その後に戻ってからは地域支援係として羽曳野市のコミュニティソーシャルワーカーの仕事をして 4 年間しました。現在はケアプランセンターでケアマネジャーとして、色々な方の家に訪問して困りごとを聞き、その方に適した支援を考えてケアプランを作成、サービスを導入するという業務をしています。

コミュニティソーシャルワーカーとして地域に住む困りごとを抱えた人の支援をしていた時に、もっと地域福祉について知りたいという思いが強くなり大学院の研究科に進みました。研究をしたことで、自分がしている地域支援や個別支援について、しっかりとした根拠や知識ができました。そのことにより、自信を持って現場で働くことができるようになりました。

現在のケアマネジャーは、1 人 1 人への個別支援なので、地域支援のコミュニティソーシャルワーカーとはまた違いますが、やはり地域に住んでいる人という意味では同じなので、そういう方の支援ができることは、すごく嬉しいです。

また大阪の社会福祉士会でも活動をしています。羽曳野や藤井寺などの南河内支部の運営委員に入っており、研修会の企画や、専門職向けの見学会とか地域向けのイベントの企画・実施に関わっています。

### 礼拝について

当時は 1 年生から 2 年間、仏教の授業があり礼拝をしていました。履修していた当時は「行かなあかん」という思いで受けていました。必修だし、とにかく行かないといけないという感じでした。ただ皆で般若心経を読むあの時間は個人的には結構好きでした。

皆で般若心経を読むことで何かすごい心が静かになる。あまりそのような時間は普段ないし学生の時は、色々なことを考えるし、悩みもあります。しかし、その時間だけは静かにただ読むという、振り返れば、すごく貴重な時間だったと思います。

業務の中で結構悩むことも多く、自分のこの支援・方法で良いのかとか、よく考えます。そんなときに、知識とか、方法とかは座学で学びましたけど、やっぱり一番大事な心という根底の部分、仏の心みたいな部分、それがそういう礼拝の時間に、知らない間に自分の中に入っていたのかなと今なら思います。また、どうしても良いのかと目をつむって考えるときに瞑想をするなど、礼拝でずっとやってきたからそこに立ち返れるということがあります。

もし出席をしなくても良いのであれば、当時だったら、他のアルバイトを優先させたいとか友達と遊びに行きたいと思うけど、振り返ってみると、ある意味強制的にそういう(座学以外のことを学ぶ)時間を作ってもらえて良かったと今は思えます。

### 学園訓について

「和を以て貴しとなす」というのが一番わかります。今の私の仕事にはすごく直結します。例えば、地域支援をする時は、皆がみんな元々うまくいっているわけではないです。でもそこに入って実際に動いていけないといけないという時には、和の心を私は意識しており、それでうまくいくようにしています。争って打ち負かすとかではなくて、地域支援は皆が満足できるようにしていかないとはいけません。一般企業とかだと、他社に勝つとか、ライバルを蹴落とすみたいになるかもしれない。しかし福祉とはそういうものではないので、この学園訓と自分のやっている仕事というのは非常に繋がってきます。また他の四恩、誠実、礼儀や健康とどの項目も全部福祉に当てはまってくると思います。

### 在学生へのアドバイス

いろんな経験を積んでおくことが、仕事に活かされます。部活やサークル、学校外の活動など、そういう経験がすごい自分の力になるので、どんどんそのような活動にボランティアでも何でもチャレンジしてください。

また大学の勉強は、在学中は面白くないかもしれませんが、しかし後にそれは重要だと分かってきますので、しんどいけど頑張って勉強しておいた方が良いでしょう。働いてから、勉強すれば良かったと思うのはよくあることです。私も学生の時はそこまで勉強熱心というわけではなかったのですが、実際に働き出すとあれもこれも知らないとか、全然知識がないということに気づきました。もっと良い支援をしたいが、そのためには独学だけでは無理だと考え、大学院で学びました。

今の在学生には、せっかく大学に入学して、色々な専門の先生から学べるこの時間を、寝て過ごすのではなくて、頑張って、とにかく頭に知識でも入れておいた方が後から役立つということを伝えたいです。経済的に厳しくバイトを詰め込み過ぎて、授業が疎かになるということもあるようですが、いま勉強を頑張ることが、後の生活が良くなることに繋がってくると考えます。悩むことも多い年ごろですが、将来のこととか、自分のやりたいことを見据えて行動してください。

## 令和元年度 夏学期「和の精神 I」講話題目

- |          |   |          |  |
|----------|---|----------|--|
| 4 月 4 日  | 上横 宏道先生「受講ころえー授業規律に関してー」<br>坂本 光徳先生「礼拝説明」<br>学生運営委員会「新職員募集の告知」  | 5 月 30 日 | 石田 陽子先生「仏教聖歌ーなぜ聖歌を歌うのかー」<br>辻 莊一先生・松原・上島「グローバル教育研修アメリカ編」<br>学生運営委員会「水無月祭スポーツ大会参加者募集告知」   |
| 4 月 11 日 | 岩尾 洋学先生「建学の精神ー『ころえ手帳』に寄せてー」<br>坂本 光徳先生「授戒会オリエンテーション」  | 6 月 6 日  | 坂本 暁美先生「学園歌ー作詞家と作曲家からのメッセージ」<br>李美子先生・杉本・森嶋・岡田・山本・吉田「グローバル教育研修中国編」<br>仲谷 和記先生「団体献血について」  |
| 4 月 18 日 | 坂本 光徳先生「就経概論」<br>伊達 由実先生「大学生生活の心得」<br>藤谷 厚生先生「『ウバーヤ』第 14 号について、聖徳太子讃仰会について」   | 6 月 13 日 | 源 健一郎先生「学園訓ー利他行についてー」<br>矢野隆男先生「学園訓『誠実』について」「和の精神(学園訓の実践)」の学修ポートフォリオへの入力について   |
| 4 月 25 日 | 杉中 康平先生「和の精神を学ぶ意義」<br>石田智大 IIR 戦略統合課員「学修ポートフォリオの記録について」<br>学生支援センター「ダイアリー作成プロジェクトについて、学生便覧使用状況調査のためのアンケートについて」<br>学生運営委員会「スポーツ大会告知」<br>米谷明図書館課員・森本・高地「COCOROE らいぶらりメンバー募集、図書館展示の告知」 | 6 月 20 日 | 大西飛羽教務課員「G20 大阪サミット開催期間中の授業実施と大規模交通規制への注意事項について」<br>南谷 美保先生「仏像を知ろうー仏様に会いに行くとは?ー」<br>源 健一郎先生「羽曳野市ボランティア募集のお知らせ」<br>田中・濱田・平松「PIATA 学修支援班主催『勉強会』お知らせ」 |
| 5 月 9 日  | 坂本 光徳先生「瞑想ー心を整える楽しみー」<br>大規模災害ワークショップ担当職員「本学の防災への取り組み」「避難訓練」  | 7 月 4 日  | 中田 貴真先生「学園訓ー礼儀についてー」<br>源 健一郎先生「百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録迫る!」<br>森本・高地・田中「COCOROE らいぶらり告知」   |
| 5 月 16 日 | 藤谷 厚生先生「四天王寺学園、建学の歴史」<br>西野恵人管財課員「四天王寺羽曳野高等学校 校舎解体・設備工事に伴う学内への大型車両通行について」<br>学生運営委員会「水無月祭応援学生告知およびクラブ団体入部生の告知」  | 7 月 11 日 | 高橋麻起子学生支援課員「性感染症のお話」「望まない妊娠を防ぐために」   |
| 5 月 23 日 | 成田由枝子先生「学生生活とリスク社会についてー犯罪に巻き込まれない、起こさないためにー」<br>高橋 麻起子学生支援課員「受動喫煙の害」「本学の禁煙支援」   | 7 月 18 日 | 高橋麻起子学生支援課員「薬物乱用と薬物依存を防ぐために」<br>上横 宏道先生「夏学期を終えるにあたって」<br>源 健一郎先生「みんなで地域農業を応援しようー『食べて応援ー作って応援』レビコンテスト参加者募集の告知」<br>米谷 明図書館課員「ビブリオバトル開催の告知」           |

## 聖徳太子ゆかりの地をめぐる

### —— 中山寺（兵庫県宝塚市）——

今回訪れたのは、兵庫県宝塚市の中山寺です。阪急電鉄宝塚線梅田駅から約30分、中山観音駅を下車すると徒歩約1分ほどで山門が見えてきます。中山寺は聖徳太子16歳の時、仲哀天皇の後である大仲姫および忍熊皇子の鎮魂供養のために、紫雲たなびくこの北摂の地をトして、創建されたと伝わっており、また、境内には大仲姫のものとされる墳墓および石棺もあります。

中山寺は我が国最初の観音霊場です。徳道上人によって開かれた西国三十三所観音巡礼の第一番札所となり、現在は花山法皇の巡礼の道順に従い第二十四番札所となっています。

ご本尊は十一面観世音菩薩立像で、頭上に11のお顔を持つ観音様です。お顔がたくさんあるのは、常にあらゆる方向を見守り、苦しんでいる人々に救いの手を差し伸べるためであり、また、それぞれのお顔は全て違った表情をされており、人々をなだめたり、怒ったり、励ましてくださるといわれています。また、インドの勝鬘夫人



が女人救済の悲願を込めて自身を模して刻まれたと伝えられ、安産・求子の観音様として信仰されてきました。こうして中山寺

は「安産の寺」として武家や庶民に古くから親しまれ、豊臣秀吉もここで祈願して秀頼を授かったとされています。また幕末にも中山寺の「鐘の緒」を受けた中山一位局が明治天皇を御平産されたことにより明治天皇勅願所となり、現在も安産祈願に全国から多くの方が訪れています。

「鐘の緒」とは安産祈願に訪れた妊婦さんたちに授けられる御腹帯を指します。これはもともと鐘を鳴らすための麻紐のことを言い、中山寺の鐘の緒には観音様の力が宿っているとの言い伝えがあります。御腹帯には干支と性別があります。これは無事に安産された方がお礼参りに来られた際、お子さんの干支と性別を教えてください、新しいさらしに書き込んで御腹帯に仕立て、祈祷の後に次の妊婦さんへ授けられます。お礼参りには無事に安産できたお礼とともに、その功德を次の妊婦さんへと伝えていく意味も込められています。

境内で一番はじめに私の目に留まったのは、お寺に設置されたエスカレーターでした。中山寺は、小高い山の麓に位置しており、山門から本堂に向かうには緩やかな坂道と階段を登る必要があります。時代の移り変わりとともに、妊婦さんや年配の方々に配慮しておられるのだと感じました。

中山寺は聖徳太子ともゆかりがあり、子孫繁栄の願いが感じられる暖かいお寺です。一度足を運ばれてはいかがでしょうか。（学生編集員：田井雅人）

## 仏教のことば

### —— 帰依 ——

帰依とはサンスクリット語のシャラナ (śaraṇa) の訳です。

特に仏教では自分の身も心もゆだね、よりどころをすることを意味しています。

仏教では、悟れる者である仏、その仏によって説かれた教えである法、そして、その教えに基づいて自らも仏になろうと努力している者たちである僧、すなわち仏・法・僧を三宝として敬い、大切にします。

この三宝に帰依することを「三帰」あるいは「三帰依」、つまり、「帰依仏」（仏に帰依いたします）、「帰依法」（法に帰依いたします）、「帰依僧」（僧に帰依いたします）といい、仏道に入るための最も基本的な条件としているわけです。

また、仏教ではサンスクリット語のナマス (namas) の訳で「南無」や「南無」という言葉も使われますが、これも、身命を投げ出して仏や、仏の教えに従うことを意味しています。ちなみに、頭を地につけて仏を礼拝し、帰依の気持ちをお祈りすることを「帰命頂礼」といいます。

三宝に帰依するという仏教の基本的な考え方は、「感謝の気持ちを忘れない」（明るく）、「我が身を振り返る」（正しく）、「仲間を思いやり敬う」（仲よく）という日々の生き方や心掛けにも通じるものと思います。（上續宏道）

## 編集後記

今号の『ウパーヤ』は、「仏教Ⅰ・Ⅱ」の授業が、今年度より「和の精神Ⅰ・Ⅱ」となって、最初の発行となりました。

「和の精神」の授業は、本学に学ぶ学生諸君が、学園訓に示されている聖徳太子が帰依された仏教を基本とした「和の精神」および「利他の精神」をしっかりと体得して欲しいという願いから行われるものです。

もちろん、週に一度の授業だけでなく、「和の精神」が身につくほど簡単なものではありません。本学の日々の授業や学生生活の中で、学生の諸君が、主体的に「和の精神」を身に付けていくことを意識して過ごして欲しいものです。（K.S）

### 研究所員紹介

所長 岩尾 洋（学長・教授）

主任研究員 藤谷 厚生（教授）

### 研究員

石田 陽子（教授） 上續 宏道（教授）

源 健一郎（教授） 南谷 美保（教授）

矢羽野 隆男（教授） 杉中 康平（教授）

奥羽 充規（准教授） 李 美子（准教授）

坂本 光徳（専任講師） 中田 貴真（専任講師）

南谷 恵敬（客員教授）

客員研究員 桃尾 幸順

### UPĀYA (ウパーヤ) 15号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

令和元年9月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-9940

URL: <http://www.shitennoji.ac.jp/>

「UPĀYA (ウパーヤ)」に関する  
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。  
[E-mail] [bukken@shitennoji.ac.jp](mailto:bukken@shitennoji.ac.jp)  
(件名は「ウパーヤ」としてください)

